

熊本地震を通じて得た思い

城 野 齊
(株式会社城野印刷所)
代表取締役社長



2016年4月、熊本・大分を経験したことがないような地震が襲った。平成28年熊本地震。14日夜の前震において益城町近郊で大きな被害が出た。明けた15日に会社の状況を確認したところ、建物が一部破損してはいたものの、印刷機などは調整をするだけで復旧が可能で、損害は軽微だった。家屋がダメージを受けた社員もいたので、この日は定時で会社を閉めた。

翌16日未明。本震が再び熊本を襲った。電気も止まり、車の車載テレビにはNHKしか映らない。まんじりともせず夜明けを待った。徐々に民放各局も復旧し情報は入ってきたが、大まかなことしか分からない。会社の状況は。社員は無事か。日が昇ると共に会社へ走った。

正面玄関が崩壊していた。中に入ることは危険と判断し、知り合いの建設会社に立ち入り検査を依頼した。社員とその家族全員の無事が確認でき、胸を撫で下ろした。続々と取引業者の方やお客様が援助物資を持ってお見舞いに来てくれた。社員が何人も会社の様子を見に来てくれた。こんなにも私たちを支えてくれる人達がいる、と救われた思いがした。この日から自分に言い聞かせるように「絶対に負けない」とブログに綴った。

18日。建設会社の方に立ち入り検査をしてもらった。柱や鉄骨に損傷が見つかり、余震で崩れる可能性があるので立ち入らないで下さいと言われ、目の前が真っ暗になった。機械の修理も出来ず、現状の復旧もままならない。思わず「廃業」の二文字が頭をよぎった。が、毎日のように顔を出してくれる社員、援助物資を届けてくれた方々、そして遠方から支援しに来てくれたお客様のことを思い、その迷いを振り払った。まずは全てのお客様へ連絡し、現状を説明の上、今後の仕事について話し合った。納期の近い仕事はキャンセルとなったものもあるが、それ以外の仕事をキャンセルしたお客様はごく僅か、それどころか復旧まで待つ、との優しい言葉をいただいた。それだけでなく、弊社がしばらく動けないから、という口上で営業をかけた同業他社を追い返したお客様もいたほどだった。有り難くて有り難くて、涙が出る思いだった。それもこれも弊社の信頼を築き上げてきた先達と、社員たちの今までの頑張りの賜物だ。ますます負けてはいられない。ならば、まずは今お客様から預かっている仕事を精一杯完遂せねばならない。危険ではあったが社屋の中に入り、原稿や伝票、制作データを運び出し、信頼できる同業者に協力を依頼した。皆、快く引き受けてくれた。自らが被災したにも関わらず、城野さんの方が大変だからという理由で、作業場所を提供してくれた同業者もいた。支えられては

かりではあったが、再生への思いを強くしていった。

21日。余震も少し収まり、建設会社の方に再度検査を依頼した。耐震補強の必要はあり、自己責任ではあるが、内部で作業することは可能であるという。すぐに復旧作業を開始した。機械メーカーに修理の依頼をかけ、私たちは社内の片付けを行った。内部は物が散乱し、パーティションや棚は倒れ、壁や天井に剥落も見られたが、皆嬉々として作業をしていた。こんなに社内が明るくなったのは初めてだ。悲壮感のかけらもない。社員は非常に前向きだった。何があっても会社を続けると誓った。

会社を続けるとなると、私たち経営陣の仕事は会社の運営と復旧をどうやるか、社員の生活をどうやって守るか、ということになる。まずは支援に関する情報を集めた。東日本大震災の際のグループ補助金の事例を知ることができ、復旧の礎とできることが分かった。また、雇用調整助成金を活用し、休業を強いなければならない社員の給与を確保することができた。そして社内の生産体制を整えることに全力を注いだ。弊社はもう立ち直れない、という誤った情報を流されないよう、ブログで復旧状況を包み隠さず配信した。週1回だった役員会議を毎日行うようにし、情報の共有化を図った。

そして29日。全てではないが、受注からデザイン、制作、刷版、印刷、仕上までの生産ラインが復旧した。すぐさまお客様に復旧のお知らせを行った。私もお支援を頂いたお客様にお礼と報告の行脚を始めた。自分1人で九州中のお客様を訪ねて回ったが、不思議と疲れは感じなかった。仕事ができる、復活できるという喜びの方が勝っていたと思う。

生産ライン復旧後、第一号の仕事は「特別報道写真集 平成28年熊本地震」の印刷だった。そもそも発注元の熊日出版（熊日サービス開発株式会社出版部）は確実に印刷を行うため、県外に発注をする予定だったという。しかし、震源地に程近い弊社が操業を再開したと聞き、弊社を指定してくれたのだ。運命的な出会いだったと思う。誠心誠意、仕事をさせてもらった。この本は熊日出版のベストセラーとなり、数字を上げようにも上げられなかった弊社の28年度の上半期を支えてくれた。その後はお客様の暖かい支援もあり、下半期は前年度を超える売上を計上している。

いいことも悪いこともあったが、何より辛かったのは退職する社員が数名出てしまったことだ。地震という非常時だったとはいえ、彼らに希望の灯を見せてやれなかったことが残念でならない。復興と再生を心に誓い、現在は社内体制の一新を図っている。地震という大きなダメージはあったが、逆に会社のことを省みるいい機会になった。

会社の復旧は何とかなる。社屋の建直し、損壊した機械の購入、移転費用などを合わせるとグループ補助金の枠20億円を超える損害額だが、取り戻す自信はある。問題は、復興需要による熊本バブルが終わった後をどう考えるか。阪神・淡路大震災という前例を見るにあたり、復興が終わった後に来る景気の後退は避けえないだろう。しかし、生きているという喜び。当然と思っていたことの有り難さ。仕事ができることへの感謝。再生へ向けた意志。これらを忘れなければ、何があっても乗り越えられる。創業100周年を被災で迎えてしまった弊社だが、今まで戦災や水害を乗り越えてきた歴史がある。地方の中小企業の身ではあるが、その逞しさを発揮してみせることにしよう。